広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第57号　2008　327－333

新任保育者におけるポートフォリオの活用の効果に関する研究

― 理論背景とその特性に注目して ―

飯　野　祐　樹

（2008年10月２日受理）

A Study on the Potential Utilization of Portfolio among Novices Teachers in Kindergartens and Nursery Schools: Focus to It's Theoretical Background and Characteristic

Yuki Iino

Abstract: The purpose of this research is to examine the potential utilization of portfolio among novice teachers in kindergartens and nursery schools by examining the theory shown by the previous research. From the aspect of self-evaluation, attention is paid to the utilization of the portfolio in various fields, and a lot of examinations are discussed in recent years. However, the recognition of the portfolio is still low, so there were hardly any studies in the past which analyzed the utilization of the portfolio in kindergartens and nursery schools in Japan. Then, in this research focus to the teachers especially novice teachers in kindergartens and nursery schools and examine the utilization of portfolio. As a result, there are three points that (1) learning the cycle about Reflection, (2) improvement of skill in documentation making, and (3) sending of the information were found as utilization of portfolio among novice teachers. On this basis, I would like to empirical research about utilization of portfolio among novice teachers from now on.

Key words: portfolio, novice teacher, kindergarten, nursery school
キーワード：ポートフォリオ，新任保育者，幼稚園，保育所

Ⅰ．はじめに

わが国の幼稚園及び保育所においては，保育経験が一年未満の保育者に対して，新任保育者，新人保育者，そして，初任者というように様々な呼び名がつけられており，場面に応じて使い分けがなされ，呼び名に対して一貫性が無い。本研究では，新任保育者に対して，保育経験が一年未満の保育者であることに加え，生涯において初めて，幼稚園または，保育所に勤務し始めた保育者という定義づけをする。

新任保育者にとって，幼稚園・保育所に勤務し始めることは，それまでの「学ぶ人」から「教える人」へというように，180度立場が転換した状況の中で保育を行うことになる。この状況の転換に伴い，それまでの自己の「被教育体験」と「教育論」によって描いていた理想の教師観（教師像）をもって実践に臨むが，就任後，現場で繰り広げられる実際の仕事とのギャップに苦しみ，これによりリアリティショックを受けることも少なくない(宇部，今林，2005)。言い換えれば，実践に従事することで，それまでの既存の知識としてもっていたものと異なるものが目の前で絶え間なく生起し，この差異を認識することにより新任保育者は少なからず戸惑いを感じていることが推測される。

実践に入ることで生起する意識の変容については，保育者養成校に通う学生を対象に様々な観点から検討がなされている。例えば，堀越（2002）は，実践に観

察者として入ることで生起する学生の戸惑いや気づきについて検討し，野口（2000）は，保育に関わり保育者と対話するプロセスを通して，ゆれる自己のあり様について模索する事例を報告している。さらに，飯野（2008）も，保育者養成校に通う学生に対して保育実習前後で生起する意識の変容を質問紙調査を用いて分析を行い，ほとんどの学生に意識の変容が生起したことを報告している。このように，観察や保育実習というように短期間の実践参加においても少なからず意識の変容が生起していることをふまえると，これ以上の期間を幼稚園・保育所で勤務することになる新任保育者にとっては多様な場面において戸惑い，またはギャップを感じることが推測される。

このように学生から保育者への移行という過程は，新任期特有のイベントであり，この点に焦点を当て，新任保育者に対してでき得る幼稚園・保育所内での関わりという観点から多くの検討がなされている。例えば，カッツ（Katz, 1972）は，新任保育者おける最も必要な援助として，園内で生じる複雑に入り組んでいる出来事を見抜く能力を直接的に指導されることを挙げ，援助者としては園長，熟練保育者，主任という経験年数が豊富な保育者を挙げている。この報告からも理解できるように，新任保育者にとって求められる能力としては，自己の幼児理解及び保育理解における視点を認識し始めることであり，自己の保育を見つめる際の基礎作りが新任保育者に求められる役割の１つとして挙げられる。

自己を見つめるという点については，近年，医療の世界をはじめ，教育の世界においても，自己評価という点に焦点が当てられている。「自己評価」には教育心理学の領域で使用される「自分で行う評価」と，社会心理学の領域で使用される「自分についての評価」という２つの意味があるが（桜井，2002），ここで使用する自己評価には前者の意味合いをもたせることとする。また，自己評価の重要性が報告されると共に，そこに寄与する方法についても検討がなされており，その１つとして『ポートフォリオ』の使用が挙げられている。このように，多くの分野において自己評価におけるポートフォリオの効果が報告されていることに加え，上記した新任保育者の実情をふまえると，新任保育者においてもポートフォリオの活用について検討を行うことは意義があるものと考える。

そこで，本研究は，新任保育者におけるポートフォリオ活用における効果の実証的研究の基礎部分として，ポートフォリオの成立背景と共に，他分野のポートフォリオに関する先行研究をふまえることで，新任保育者におけるポートフォリオの活用可能性について理論を基に検討を行うことを目的とする。

Ⅱ．ポートフォリオの成立過程及び定義

ポートフォリオ（Portfolio）とは一般的に，「書類などを入れるカバン（薄い書類入れ）や紙ばさみ」を語源としており，カバンの中に入っている書類を個別に扱うのではなく，カバン全体を１つのものとして扱うという意味を持っている。つまり，情報の一元化を目的として作成されるファイルのことで（鈴木，2003），これが後に，投資家の資産管理や，写真家や建築家の業績証明において使用されるようになった。このように，ポートフォリオは多くの分野で活用されており，その作成形態や作成目的についても多様性がうかがえる。

このようなポートフォリオの活用の広がりに伴い，教育界においてもその活用は注目され始めた。教育界におけるポートフォリオの形態については，社会構成主義の学習観を基に，ロンドン大学のクラーク（S. Clerk）を中心に考案され，量的評価の限界に伴う質的評価へのシフトを背景として1980年代後半より英国や米国で発展した。

この「構成主義（Constructivism）」の発想では，学習者が過去の学習経験や生活体験で得た既知なるものを確認することから始まり，その既知なるものと未知なるものとの間で学習者自身がどのような「葛藤」を引き起こしたかについて認知するプロセスをたどる。つまり，このような既知と未知との往還のプロセスの中で，どのような納得の仕方で「知の組み換え」を行ったかによって再確認がなされるのである。シャクリー（B. D. Shaklee）等は，この「構成主義」の提唱者としてデューイ（Dewey, J），ヴィゴツキー（Vygotsky, L. S.）等を挙げており，共通するアプローチとして，「自分の経験に関する個人的な理解とは，構成する能動的な行為者として，様々な学習環境の中で相互作用しながら学ぶことである」と規定している。さらに，同学習観の中心概念に，自己調節学習者（self-regulated learners）こそが理想的な学習者であるという見方があるが，この自己調節学習者とは，効果的な学習方略をどのように，またいつ用いればよいかを知っている学習者であり（Salvin, 2002），そこに寄与する記録物としてポートフォリオが位置づけられるようになった。

また，教育評価におけるポートフォリオについては様々な定義づけがなされている。例えば，クレモンズら（Clemmons, Laase, Cooper, Areglado, Dill, 1993）は，ポートフォリオを「進歩に関する発達的描写」と

定義し，トンバリーら（Tombari, Borich, 1999）は,「達成したことやそこに到達するまでの歩を記録する学習者の学力達成に関する計画的な集積」と定義している。また，教師教育においてもその有効性が示されており，ブロックら（Bullock & Hawk, 2001）は,「ポートフォリオを通して，教員養成段階の学生は，教えるための知識の獲得や教える能力をまとめることができ，大学教員は，学生に現れつつある能力や知識の反省を促すことができる。」と述べている。さらに，コンスタンティノら（Constantino & Lorenzo, 2002）は,「ポートフォリオは，教師の仕事のオーセンティックな証拠を提供するものであり，教育実践に関するふり返りを促す手段である」として意義づけている。

このように，ポートフォリオは80年代以降の構成主義の台頭に伴い，学習の過程を認識するための手段の１つとして考案された記録物であり，その根底には自己学習の概念が基づいていることが理解できる。

Ⅲ．ポートフォリオの特徴

ここでは，先行研究をふまえポートフォリオの特徴についての検討を行うこととする。

ポートフォリオの全体的な特徴として安藤（2004）は,「自分が自発的に学びの伸びや，変容を，多面的，多角的かつ長期的に評価し，新たな学びに生かすために，学習物を集めたもの」であるとし，バートンら（Barton, Collins, 1997）は,「目標・目的が明確であること，到達の過程を含むものであるもの，様々なリソースを含こと」などをポートフォリオの特徴として挙げている。

また，機能の特徴として，高浦（2000）は，多様な資料が含まれることを挙げ，佐藤（2004）は,「自己評価能力を向上させ，メタ認知能力を育む」という点に意義を見出している。自己評価という点についてグロワード（1999）は,「学習活動で成し遂げたことの中で，価値あるものと判断される事例をポートフォリオに組み込むことで，その価値を認めることと」としている。つまり，何をポートフォリオに組み込むかについて作成者が思考をめぐらせることで,「自己評価能力」を高めることにつながっていくことが考えられる。さらに，リオンズら（Lyons, Condon, 2000）は，様々な分野で使用されているポートフォリオの特徴における共通点を基にモデル化を試みている（図１）。

この図は，ポートフォリオを形成する上で必要不可欠な要素であるコレクション（Collection），反省（Reflection），選択（Selection）との関係を示したものであり，この循環過程を繰り返して行うことにより，単なる収集物から目的をもった学習ファイルへと変化することを報告している。

次に，ポートフォリオ作成の過程において実施が推奨されている活動について，リンら（Lin, Ground, 2000）は，作成目的や方法などを事前に学習者に明示することを示している。また,「ふり返り」における活用方法についても先行研究において指摘されている。例えば，ジェニスら（Genesee, Upshur, 1996）は，ポートフォリオの作成を通して学習したことを対話や話し合いをしながら振り返る場としてのカンファレンスの実施や，自分の目標と成果についての振り返りを記述するゴールカードの実施（Smolen, Newman, Wathen, Lee, 1995），さらには，ポートフォリオの作成過程に内在する内省活動をより効果的にするために学習方略を意図的に教授すること（Klenowski, 2002）等が挙げられる。

このように，ポートフォリオの特徴として鍵となる要素は,「情報の収集（Collection）」,「反省（Reflection）」,「必要な情報の選択（Selection）」が挙げられる。さら

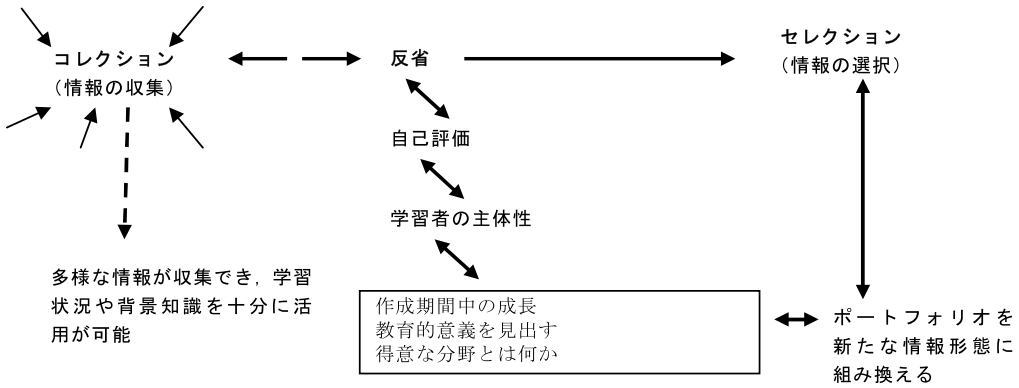

図１　ポートフォリオの基本的な特徴（Lyons & Condon, 2000）

に，ヤンシー（Yancey, 1992）はこの３つの要素に加え，「コミュニケーション（Communication）」と「評価（Assessment）」を付け加えており，これら５つの要素が循環的にさらに継続的に行われることによって，その効果が発揮されるものと考える。その際，留意すべき点としてクレノウスキら（Klenowski, Askew, Carnel）は，収集された情報について，達成した内容の証左（Summative）としてのみの使用ではなく，今後の発達の指針として（Formative）も活用するべきであると指摘している。つまり，ポートフォリオを有効に活用するためには，目標を定めた上で，“summative”な側面と“formative”な側面を正しく理解しておく必要があると言えよう。

Ⅳ．教師教育におけるポートフォリオの活用

ポートフォリオは教育の分野においても取り入れられるようになり，近年では，教師教育において活用される機会が多くなっている（Constantino & Lorenzo, 2002）。その背景には，ポートフォリオの作成過程が，教授能力の記録，専門性の発展，反省的思考の促進において価値あるものとして受け止められていたことが挙げられる。

では，教師教育においてポートフォリオを使用する場合，ポートフォリオはどのような形態となるのか。ポートフォリオは「心の封筒（an envelope of mind）」（Dietz, 1955）と示されているように，進行し続けている，専門性の向上，継続的学習そして，教授と呼ばれる複雑に入り組んだ活動において獲得された能力を表現するために集められた，芸術品，証拠，そして省察などによって構成されている（Kilbane & Milman, 2003）。つまり，ポートフォリオは選択，比較，共有，自己評価，目標設定というような継続評価という側面をもち，そこには，成果，努力，進歩，過程などを検討するための目的をもった収集物が組み込まれている（Tierney, Carter & Desai, 1991）。しばしば，ポートフォリオについてはスクラップブックと比較されることがあるが，スクラップブックとポートフォリオの大きな違いとしてはポートフォリオには情報の保存に加え，教師の知識や技能の証拠が保存されるという点で相違がある。さらに，ポートフォリオ特有の機能として，１．ポートフォリオは様々な信頼性のある情報源から最も必要とする情報を選択することができること，２．ポートフォリオの作成者は同時にポートフォリオの開発者なること，そして，３．ポートフォリオは将来の専門家としての到達目標を決定する際に効果を発揮するという３つの特徴が挙げられる。このように，ポートフォリオの形態には，情報収集機能に加え，それに対する作成者の気づきというものが深く関わっており，作成主体が作成者にあるという点で他の記録物との間に相違がうかがえる。

最後に，教師教育におけるポートフォリオの作成目的について検討を行う。ポートフォリオ作成の主要目的は，成長し続けている教師として，個々の成長や進歩を記録において保存することにある。つまり，長い期間を通して生起する個々の成長，進歩，そして変容を理解する方法であり，そこでは過程と成果という２つの要素が生成されている。その際，個々の教師の信念を表現するために，文章，画像，写真，音，映像，そして，その他の芸術品を選択及び組織化することで省察が生起し，この点が専門性の理解や自己評価において絶好の機会となるのである。

Ⅴ．新任保育者におけるポートフォリオの活用可能性の検討

分析の観点について

ポートフォリオの成立の過程及び定義と，その特徴については上述した通りである。本章ではこれらの点に加え，新任保育者の実情をふまえることで，新任保育者におけるポートフォリオの作成意義について検討を行うこととする。

新人教師が抱える課題の１つとして木原（2002）は，経験が乏しいために問題を解決するリソースの所在が分からないといった点から疲労し，自己研修の方策を心得ていないために自身を喪失することがあると報告している。自己研修の成立においては，自己学習者としての教師像が求められ，近年では，自己学習という観点から教師の「省察」について様々な分析がなされ，自己学習における省察の重要性が報告されている。つまり，新任保育者においては，自己学習者としての基礎作りであると同時に，保育をとらえる視点，言い換えれば，省察における視点においても基礎作りが必要な時期と言えるだろう。上述したように，ポートフォリオの機能の１つとして，省察の効果があることをふまえると，ポートフォリオ作成が新任保育者の省察にどのように寄与するのかについて検討することは意義があるものと考える。

また，カッツ（Katz, 1972）の論をはじめ，数多くの研究が指摘しているように，新任教師の成長は，周りの人間のサポート，中でも，他者との対話や協同の有無といったインタラクションに大きく依存しているということが報告されている。ヴェン（Ven, 1988）

においても新任保育者と熟練保育者の思考の形態を比較して，新任保育者はある事柄に対して１つの要因を見出すという「単線型」の思考をたどる傾向があるのに対し，熟練保育者は，多数の要因を見出すという「複線型」の思考傾向があることを示している。この論からも，新任保育者と他の保育者とのコミュニケーションの重要性がうかがえる。幼稚園・保育所において情報共有における方法の１つとしては保育記録の作成が挙げられ，保育記録において幼児理解や保育理解を深めることは，新任保育者の情報共有をより豊にすることが考えられる。また，ポートフォリオの情報収集から選択という機能をふまえれば，ポートフォリオの作成は新任保育者の保育記録の作成技術の向上と共に，ポートフォリオ自体も情報共有の方法として活用できることが推測される。

以上をふまえ，本研究では，新任保育者におけるポートフォリオの活用可能性について，省察における活用可能性，記録作成における活用可能性，そして，情報共有における活用可能性という３つの観点から検討を行うこととする。

ⅰ．「省察」における活用可能性について

上述したように，ポートフォリオの機能の１つとして「省察（Reflection）」の機能が見出された。ここに寄与するのは，ポートフォリオの作成過程におけるセレクションの段階であり，集められた情報の中から目的に沿った情報を抽出する過程において作成者の省察が生起するということが起因している。近年では，省察の概念を基にショーン（Schön, 1983）が主張する「反省的実践家モデル」が注目されている。ここには自己学習者としての専門家の姿を中心に論が構築されており，これは，構成主義の中心概念として位置づけられている自己調節学習者に通じる概念であることが考えられる。また，ギブス（Gibbs, 1988）は，省察の循環過程として以下のモデル（図２）を示しており，このモデルから，省察の過程として，課題の把握，課題の検討，そして，課題の改善，という大きく３つのプロセスをたどることが理解できる。この過程と，上記したポートフォリオの特徴とを比較してみると，その流れに共通性が見出される。つまり，ポートフォリオの作成過程は，省察における流れと共通する過程をたどっており，言い換えれば，ポートフォリオの作成を通して省察の流れが機能的に生起すると言えるだろう。この点をふまえれば，幼稚園・保育所に入って間もない新任保育者におけるポートフォリオの使用は，機能的な流れの下で省察のプロセスを循環させることにより，その流れをつかむという点において新任保育者個々の省察に寄与することが考えられ，これは自己学習者としての基礎作りにおいても寄与することが考えられる。

ⅱ．記録作成における活用可能性について

保育における重要な活動の１つに保育記録の作成が挙げられる。保育活動において記録を取る意義については様々な観点から検討がなされており，記録を取り幼児理解を深めていく試み（中村，磯部，1994，友定，1992，1995）や，記録に基づくカンファレンスの有効性について（秋田，安見，小林，島井，寺田，1998）というような検討がなされている。さらに，その効果として，記録を他者に公開することによって，自分の実践を客観的に見つめなおすことが可能となることや（後藤，2000），記録を取ることで教師同士が子どもを見る視点を提供し，保育を省察する手段となりうること（Helem, Beneke, & Steinheimer, 1998）などが報告され，保育活動における記録を取ることの重要性が示されている。このように，保育活動における記録に

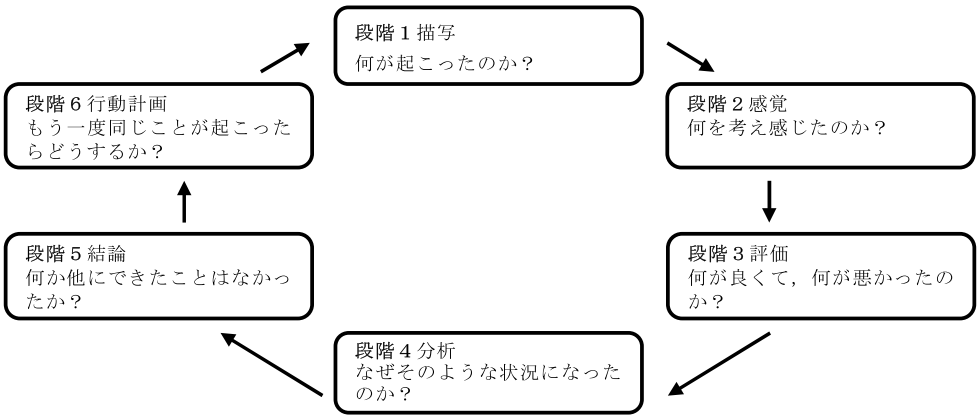

図２　Gibbs の「省察」の循環過程（1988）

は，作成者の幼児理解及び保育理解（小川，2000）が深く関わってくることが考えられ，保育記録の作成を通してこれらの点を整理し，個々の保育を向上させていく点においてその作成意義があると言えるだろう。

新任保育者における保育記録の作成という観点からポートフォリオの活用可能性について検討を行えば，ポートフォリオの情報収集及び選択の機能において効果があるものと考える。高濱（2001）は，保育経験の浅い保育者は，手探りの状況の中で，試行錯誤を繰り返しながら保育を行っていることを報告している。また，ヴェン（Ven, 1988）においても新任保育者と熟練保育者の思考の形態を比較して，新任保育者はある事柄に対して１つの要因を見出すという「単線型」の思考をたどる傾向があるのに対し，熟練保育者は，多数の要因を見出すという「複線型」の思考傾向があることを示している。これらの論をふまえれば，ポートフォリオを使用することで収集される情報の幅に広がりがもたらされ，さらに，ポートフォリオ特有のセレクションの機能をふまえれば目的に沿った情報を抽出するという点においても寄与することが考えられる。つまり，情報収集及び選択の能力が十分に備わっていないであろう新任保育者にとっては，多様な情報から必要な情報を抽出し記録を作成するという行為は新任保育者の実態に即した形態に成り得るものと考える。

ⅲ．情報共有における活用可能性について

最後に，情報共有における観点から活用可能性について検討を行う。カッツ（Katz, 1972）は，新任保育者おける最も必要な援助として，園内で生じる複雑に入り組んでいる出来事を見抜く能力を直接的に指導されることを挙げ，援助者としては園長，熟練保育者，主任という経験年数が豊富な保育者を挙げている。この論をふまえれば，ポートフォリオは状況整理と共に，会話やカンファレンスにおいて，それらの状況を他の保育者に伝えるという情報発信においても活用可能性があることが考えられる。この点においても，ポートフォリオのセレクションの機能は，他の保育者に何を伝えるべきかという機会を設定し，この機会においても情報選択の能力の向上につながるものと考える。

以上のように，新任保育者におけるポートフォリオの活用可能性として，「省察」におけるプロセスの修得，保育記録作成における技能の向上，他の保育者への情報発信及び情報共有においてその活用可能性が見出された。

Ⅵ．おわりに

本研究では，近年，自己評価の方法として多くの分野で使用されている『ポートフォリオ』に焦点を当て，わが国の幼稚園・保育所における新任保育者におけるポートフォリオの活用の効果について，先行研究で示された理論を基に検討を行った。

その結果，「省察」における流れの修得，保育記録作成における技能の向上，そして，他の保育者への情報の発信においてその活用可能性が見出された。これら３つの活用可能性に共通する点としては，自己学習者としての理論を根底においており，言い換えれば，ポートフォリオの作成は保育者となって間もない新任保育者にとって，自己学習者としての基礎作りに寄与することが考えられ，この点を見出せたことは意義があるものと考える。

しかし，本研究では，先行研究から理論を基にその活用可能性についての検討を行ったまでにとどまっており，今後は実践場面における実証的検討が必要になってくると考え，この点を今後の課題として考えている。そのためにも，新任保育者の実態に即したポートフォリオの作成形態，作成方法についても今後さらなる検討が必要であると考える。

【引用・参考文献】

秋田喜代美・安見克夫・小林美樹・鳥井亜紀子・寺田清美（1988）１年間の保育記録の省察過程　１人の子どもの育ちをめぐるカンファレンス　立教大学心理学科研究年報 第40号 59-72

安藤輝次（2004）評価基準と評価基準表の段階的導入を 指導と評価 15-20

Barton, J. & Collins A (1997) Portfolio assessment: a handbook for educators. Dale Seymour Publications.

Bullock, A. A. & Hawk, P. (2001) Developing a Teaching Portfolio. a guide for preservice and practicing teachers. Prentice-Hall

Constantino, P. M. & De Lorenzo, M. N. (2002) Developing A professional Teaching Portfolio A Guide For Success. Allyn & Bacon.

Dietz, M. E. (1955) Using portfolios as a framework for professional development. Jounal of Staff Development, 16(2), 40-43

エスメ・グロワート著 鈴木幸秀訳（1999）教師と子どものポートフォリオ評価 論創社

Genesee, F. & Upshur, J. A. (1996) Portfolio and conference. In Classroom - Based Evaluation in

Second Language Education, Cambridge University Press, NY, 98-117

Gibbs, T. (1988) Learning by Doing. A Guide to Teaching and Learning Methods. Futher Education Unit,Oxford Polytechnic, now Oxford Brookes University.

Hamp, L. L. & Condon, W. (2000) Assessing the portfolio. Principles for practice thepry and research. Cresskill

Helm, H. J., Beneke, S., & Steinheimer, K. (1988) Windows on Learning. Documenting Young Childre's Work. Teacher College Press.

堀越紀香（2002）「役に立つ」ことにこだわる私へのこだわり ―新しいフィールドにおける輻輳的立場への同様― Inter-Field vol3 6-16

飯野祐樹（2008）保育科専攻の学生における保育の「ふり返り」に関する研究 ―保育実習前後の比較を通して― 広島大学大学院 幼年教育研究年報 第30巻 121-128

J. Glemmons., L. Lasse., D. Cooper., N. Areglado. & M. Dill (1993)Portfolio in the classroom. A teacher's sourcebook. Scholastic Professional Books.

Katz, L. G. (1972) Developmental Stages of Preschool Teachers. The Elementary School Journal, Vol73, No1. 50-54

木原俊之（2002）自分の授業を考える 浅田匡・生田孝至・藤岡完治（編）金子書房

Kilbane, C., & Milman, N. (2003) The digital teaching portfolio handbook A how - to - guide for educators. Boston. Allyn & Bacon.

Klenowski, V., Askew, S., & Carnell, E. (2006) Portfolios for learnind, assessment and professional development in hogher education. Assessment & Evaluation in Higher Education. Vol 31, No3, 267-286

Klenowski, V. (2002) Developing Portfolios for Learning and Assessment, Processes and Principles. Routledge Falmer, LondonLinn, R. L. & Gronlund, N. E. (2000) Portfolios. In Linn, R. L. & Gronlund, N. E.(eds.) Measurement and Assessment in Teaching (8th ed.) Prentice-Hall, Nj 289-313

Martin, L., Tombari. & Gray D. (1999) Authentic assesment in classroom. applications and practice. Merill

中村万紀子・磯部景子（1994）日々の保育を見直すⅠ ―保育記録を，保育後の長い長時間経過の中で繰り返し見直す意味― 山口大学教育学部研究論叢 第３部 芸能・体育・教育・心理 第44号 259-275

野口隆子（2002）保育現場のゆれる自己 ―「あの時あれでよかったか」に関する想起をめぐって Inter-Field vol3 30-43

小川博久（2000）保育実践学における記録の意義 ―個人記録のもつ限界と効用― 日本保育学会大会研究論文集 53号 330-331

桜井茂男（2002）自己評価のメカニズム 自己評価はどのように発達するか 指導と評価 9-14

Salvin, R. E. (2002) Education Psychology. Theory and Practice (7th ed) Allyn and Bacon.

佐藤真（2004）総合的な学習でポートフォリオ評価 指導と評価

Schön, D. A (1983) The Reflective Practitioner. How Professionals Think in Action. Basic Books. 佐藤学 秋田喜代美訳（2001） 専門家の知恵 ゆみる出版

鈴木敏恵（2003）総合的な学習・プロジェクト学習 ポートフォリオ解説書 教育同人社

Smolen, L., Newman, C., Wathen, T. & Lee, D. (1995) Developing student self-assessment strategies. TESOL JOUNAL, Autumu, 22-27

高濱裕子（2001）保育者としての成長プロセス―幼児との関係を視点とした長期的・短期的発達― 風間書房

高浦勝義（2000）ポートフォリオの評価法入門 明治図書

Tierney, R., Carter, M., & Desai, L. (1991) Portfolio assessment in the reading-writing classroom: Norwood, MA: Chritopher Gordon.

友定啓子（1992）保育記録論 ―保育者による幼児の行動の記述― 山口大学教育学部研究論叢 第３部 芸能・体育・教育・心理 第41号 291-297

友定啓子（1995）保育記録論（2）記述による幼児理解 ―理解しにくい子ども― 山口大学教育学部研究論叢 第３部 芸能・体育・教育・心理 第45号 255-263

宇都慎一郎・今林俊一（2006）初任教師の心理発達に関する研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編 57巻 97-122

Ven, K. V. (1988) Pathways to professional effectiveness for early childhood educators. In B. Spodek, O. N. Saracho & D. Peters (Eds), Professionalism and the early childhood practitioner. Teachers College Press.

Yancey, K. B. (1992) Portfolios in the Writing Classroom. An Introduction. The National Council of Teacher of English, Illinois

（主任指導教員 七木田敦）